

石灰窒素を欠かさぬ野沢菜の契約栽培

除草・殺虫・長効き・有機補給

山梨県三珠町・小林八郎氏

春・秋2作で安定栽培25年

山梨県西八代郡三珠町の小林八郎さんは、25年以上にわたり、野沢菜の契約栽培をつづけている。栽培にあたっては、有機物の補給と石灰窒素は欠かしたことがないという。

三珠町は、甲府市に隣接した笛吹川左岸の曾根丘陵に位置し、果樹、野菜、水稻の複合経営が営まれており、なかでも、野沢菜、スイートコーンの栽培が盛んな地域である。小林さんが住む同町大塚地区は、以前は養蚕が盛んで、桑用に除草・殺虫および長効きの肥料として、石灰窒素が多く使われていた。そのため、ごく自然に野沢菜、スイートコーンにも石灰窒素が使われるようになり、現在も病害対策としての農薬効果を期待して使用している。

大塚地区では、65戸で部会を結成し、春とりの12月から1月播種と秋とりの9月播種の年2作栽培で合計36ha作付している。収穫された野沢菜は、1束550gに束ねパレットにバラ積みして、同地区のJA西八代集出荷場へ持ち込む。それが、直ちに大型トラックで長野県の加工業者に直送される。

最近では、野沢菜の需要が減少し、栽培をやめる産地もあるが、大塚地区の野沢菜は品質がきわめて高いことと、出荷数量と期日を当初の契約どおりに実行していることが評価され、栽培面積は安定している。

★小林さんは、25年以上にわたり、野沢菜の 契約栽培をつづけている



収量増よりも高品質をめざす

小林さんは、春と秋合わせて120aを奥様と娘さんの3人で作付しており、高品質な野沢菜を長年にわたり生産することができた一因として、石灰窒素の使用をあげておられる。また、今後は?との質問に対しては「品質の高い野沢菜生産を維持するためには、よい資材を使用するのはもとより、手間をかけることが必要であるため、現状では面積拡大は当面考えていない」とのことであった。

単に収量増をめざすのではなく、よい品質のものを供給するという考えで取り組んでおられ、野沢菜にかける並々ならぬ思いを感じさせられた。

